

意外と怖い、くすりの飲み合わせ

薬学部教授 ^{おおたに}大谷 ^{ひさかず}壽一

あるくすりの働きが、他のくすりや飲食物によって影響を受けてしまうことがあります。これが「くすりの飲み合わせ」で、専門的には「薬物相互作用」といいます。くすりの副作用は、全米の死因第5位ともいわれていますが、くすりの副作用で入院した患者さんについて原因を精査してみると、本来防げたはずの副作用のうち、約4分の1に薬物相互作用が関係していたとのこと。

では、薬物相互作用はどのようにして起こるのでしょうか。これには2通りのメカニズムが考えられています。一つは、ある薬物の体内レベルが、他のくすりや飲食物によって影響されてしまうケースです。体内レベルが高くなりすぎれば有害反応につながりますし、逆に低下すればくすりの効果は得られません。代表的な例としては、グレープフルーツジュースが一部の高血圧治療薬の解毒代謝を抑制し、

その結果、高血圧治療薬の体内レベルが上昇する、といったケースがあります。くすり同士の組み合わせですと、片方の薬物の体内レベルが30倍以上にまで上昇するような例もあります。もう一つのメカニズムは、薬物の体内レベルは変化しないけれども、くすり同士が効果や副作用を強め合ったり、弱め合ったりするということです。血液の凝固をおさえるワルファリンの働きを、納豆が弱めてしまうようなケースがこれに該当します。

くすり^{*}と他のくすりや飲食物を同時に摂取しなければ、薬物相互作用は生じないかという点、必ずしもそうではありません。前述の、グレープフルーツジュースが解毒代謝を抑制する作用は、数日間持続するといわれています。くすり同士の組み合わせによっては、なんと、1カ月以上前に服用していたくすりとの間でも薬物相互作用が起ることが知られています。

医療機関で処方されたくすりについては、医師や薬剤師が、薬物相互作用のリスクも含めて、内容を精査、チェックしています。しかし、複数の病院を受診していたり、病院以外に街の薬局でくすりを購入して使用していたりする場合は、そうした情報を医師や薬剤師に申告しなければ、適切なチェックができません。ですから、くすりを受け取る際には、自分が服用している他のくすりについてはもちろん、サプリメントや、過去に服用していたくすりなどについても、できる限り正しく医師や薬剤師に申告することが、薬物相互作用を防ぐための第一歩といえます。^{*}「お薬手帳」などを活用して、自分のくすりに関する情報もしっかりと管理しておくことも大切です。

^{*}お薬手帳・調剤された薬の内容を記載する手帳のこと。調剤薬局にて無料でもらうことができます。